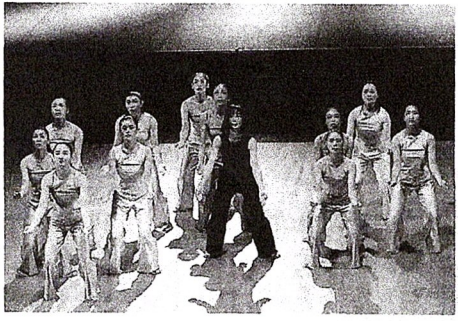
時評

藤田佳代舞踊研究所 モダンダンス公演 菊本千永モダンダンス ステージV

4つの作品が上演された舞台。幕開けは、今回、菊永千永が新たに、レカシウス・カンチェリの曲に作舞した「across―わたしが生まれる」。菊本を中心に、群舞とともに18人で踊られた。梨木香歩の小説「ミケルの庭」のなかの一節、背中に置かれた手を「…手は確かさに満ちて力強い。まるでその上から、何世代もの女たちの手がふわりと重なっているかのように」から感じたものを表現したいと創られた。手と手を合わせて繋がる女性たち――女性ゆえの生きづらさも多い日本社会のなかで、そっと前に押し出してくれる〝手〟、心に温かいものが残る作品だった。



「across―わたしが生まれる」（11月9日、東灘区民センターうはらホール）　© 中野良彦

二つ目は、菊本自作自演の「月の森にねむる」。これは以前も観て記憶に残っていた作品。ベートーヴェンの曲をサヌカイトを使ってアレンジした幻想的な響きの中、銀髪で踊る。森に棲む妖精のようで、自らの手を大きな口をあけて食べるようなしぐさは舞踏の妖しさにも繋がる。透明感のある美しさに惹きこまれた。

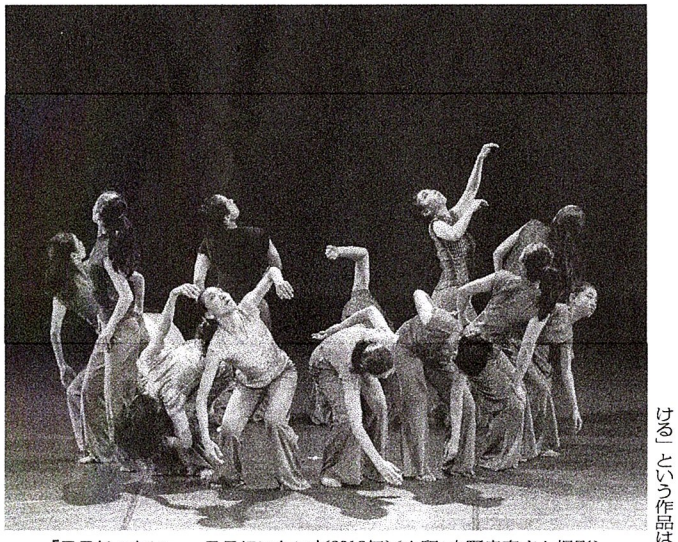
菊本作舞で、向井華奈子を中心に踊れる5人で見せた「カクレミノを編む」を経て、最後は、師・藤田佳代作舞「満ちる・10拍子のうた」。無音の中、大人数が息を合わせて手をパンと叩く様に見入った。

（松（まつ）あつこ）

藤田佳代舞踊研究所

自分の体で 自分の思いを 自由に

藤田佳代舞踊研究所はモダンダンスを研究し42年。発表会、リサイタル、創作実験劇場など開催。県内、大阪、奈良に19の支部教室を開いています。同研究所主宰の藤田佳代さんと代表の菊本千永さんにモダンダンスの魅力を聞きました。



「ここじゃない――ここにいたい」（2018年）〔＊印：中野良彦さん撮影〕

――「モダンダンス」とはどんな踊りなんですか？

藤田　二十世紀の初めに生まれた新しいダンスです。自分の体で自分の思ったことを表現するんです。

まず、自分の考えがあること――いちども自分で考えたことのない人にはモダンダンスはできません――今の世の中と自分がどうかかわっていくかということですね。

世の中と関わって

――〝東北の地震と津波と原発事故で亡くなった数限りない命たちへ〟を副題とする「届ける」という作品は大震災の次の年、二〇一二年の初演以来、毎年の発表会で上演されてますね。

藤田　「届ける」は、音楽はなく男性陣の手拍子・足拍子で踊ります。踊り手も手に下駄をはいて打ち鳴らします。十年続けさせてね、とお願いして、あと二回ですかね。

発表会は昨年、第四十二回を無事に終えました。毎年、新作を二作品を発表してきました。子どもたちも毎年の「新しいお話」を楽しみにしてくれています。

訓練方法を編みだす

藤田　自分の考えを自分の体で表現する――ただそれだけなんです。そのためには自由に動ける身体が必要です。それで訓練方法――「メソッド」といいます――をいっしょうけんめい作ったんです。一九七八年にイギリスから帰国して、そこから出発しました。

菊本　クラシックバレエは何百年もかけて確立されたメソッドがあります。モダンダンスでは、カンパニー（舞踊家の集団）それぞれ基本の動きが違います。自分たちの作りたい作品に合わせて、自分たちを訓練するわけです。

研究所で語る藤田佳代さん

藤田　十のカンパニーがあったら十とも訓練の方法が違う。それで私も研究所を設けてメソッドを作ったんです。

イギリスのコベントガーデンダンスセンターではクラシックバレエからモダンダンスまで色々な教室がありました。朝、子どもたちを学校に送ってから、クラシックバレエの授業を二時間、昼からはモダンダンスの様々な先生に習いました。

なかでもジョン・オブライエンという先生のところに熱心に通いました。そしてオブライエン先生が基礎訓練のために作った音楽のレコードを日本へ持ち帰ってきました。

菊本　基礎訓練に使う音楽には、太鼓をバンバンバン……と鳴らすものもありますし、ピアニストがその都度、即興で弾いてくれる――日本では夢のまた夢、たいていは録音です――ものもあります。

藤田　そのレコードで〝藤田流〟の基礎訓練方法を作ったんです。

菊本　教室では子どもたちに、まずバレエの基礎訓練を。踊りもストーリーのある、具体的なもの――ここはこういう場面で、あなたの役はこうで、だからこんな風に踊って――と教えます。それから、子どもたち自身で動きを考えたり、もう少し大きくなったら自分で作品を作る……そんな風に変わっていきます。

藤田　モダンダンスには「行き止まり」「ゴール」がないんです。八十三歳の方も「まだまだ」と踊っていらっしゃいます。

舞踊家の生活は

――みなさんはどうやって暮らしをたてているんですか？

藤田　スタッフは六人です。自分流の踊りを踊ってくれる生徒さんがたくさん集まればいいのですが、なかなかね。また、スポンサーがいっぱい付いては、自分の考えを押し通せませんでしょ。そこが、私らが貧しい所以です。

でも、お互いに〔公演に〕出てね」「出てね」「あなたの公演に私も出るから」とこうやって六人で支え合ったら、ちょと良いものができます。

それぞれに考えかたは違うから一人一人が独立してもいいですが、少しずつ力を貸し合って、六人で立ち上がっているんです。座り込まずに。

本部教室と各地に教室を開いて、生徒さんに来ていただいて、そのお月謝でなんとか六人が専任で生活しています。みんな扶養家族ですが。研究所の後援会も作ってもらって、公演の費用などの支援を受けています。

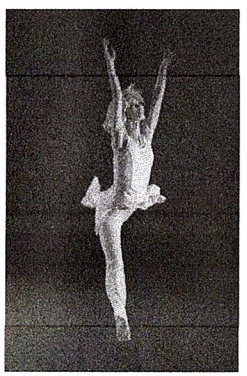
菊本　公演ごとに行政から助成をいただいています。減ってきているとはいえ、県と神戸市からは助成がありますが、国の助成は私たちのような小規模のところはすっぱり打ち切られています。丸三年、助成がありません。

どうやって観る？

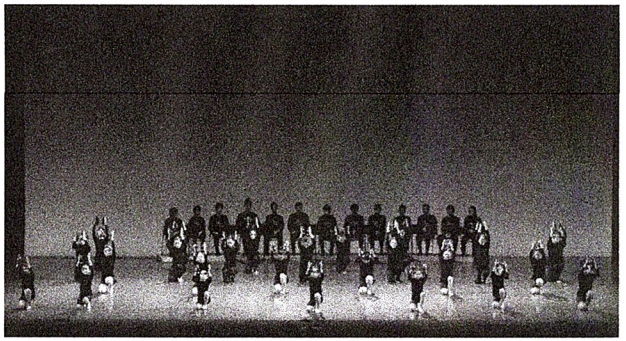
――「観方」「楽しみ方」のようなものはあるんですか？

藤田　観に来た人自身がこの踊りを気に入るかどうかですよね。

（四面に続く）



「月の森に眠る」を踊る菊本千永さん（2019年）＊



「届ける」初演（2012年）＊

（三面の続き）

「私はこうこうで、こうやって……」と説明する言葉の方が多くなったら、踊らないで言葉で表現したらいい。適切な上手な言葉で人を説得できたらいいなと思うんですけど、できないのです。だから踊ってるんです。

菊本　同じ音楽を使って、タイトルを決めて、踊ってみて、といっても六人が六人とも違う踊りができてくるんです。作品ごとに、こういう風に作ったからこう見てほしいという思いはありますが、〝モダンダンス一般は、こう観る〟というものはないんです。

藤田　作品それぞれにプログラムには一言コメントを書いています。

――「兵庫民報」での公演案内記事はそのコメントを使って作品を紹介をさせてもらってます。

藤田　作品をつくるときは、ちゃんと構築したいと――「これこれの三本柱で……」と言いたいけど、そのうちに四階建てだったのがぺしゃんこになって三階建てになったり……作っているうちにどんどん変わっていきます。あらかじめ「ああや、こうや」と人を説得して、できあがったら「先生、うそばっかり」と言われることもあるから、構築についてはあんまり言わないんです。

菊本　作者の思いにしばられなくてもいいんです。

藤田　観て、楽しくなって心が晴れればよい。言葉にできないけど、腹も立ないし、「ギャーッ、うれしい！」ということでもないけど、何かがポッとうかんだ感じになってもらえれば、「大成功」だと思ってます。

次の新作は……

藤田　次の公演へ向けて「逝（ほとばし）る」という作品を作ってます。

星空、宇宙、そこから妖精たちがどんどん出て来る――県立芸術文化センター小ホールで上演しますから、舞台から客席の階段へ子どもたちが演じる妖精たちがだーっと駆け上がって来る――。

これに子どもたちに出てもらおうと絵を見せながら説明してみるんです。

「ここ宇宙やろ。妖精たちは、どうやって地球に来ると思う？」というと、「卵で！」と答えが返ってきます。

「せやけど、宇宙人、ぜんぜん来ないね。なんでやろ？」と尋ねたら「えー？？？」と黙ってしまう。「地球では人間どうし戦争で殺し合いをしてる。こんなとこに来たら自分らも危ないと思って、来ないのとちがう？」――こんな話をしながら作っています。

――公演が楽しみですね。

＊

藤田佳代舞踊研究所／神戸市東灘区住吉本町一丁目四一四　ASビル三階（JR住吉駅北徒歩二分）／☎078・822・2066／親子で楽しむ二歳児クラスからシルバークラスまで多様なレッスンを行っています。

同研究所のホームページ